HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 時代に応える臨床心理発達相談 ： 日本の先達、城戸・留岡・奥田からの伝言 |
| Author(s) | 間宮, 正幸 |
| Citation | 子ども発達臨床研究, 11, 45-55 |
| Issue Date | 2018-03-20 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/rcccd.11.45 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/68820 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 06_1882-1707_11.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 時代に応える臨床心理発達相談

## ── 日本の先達、城戸・留岡・奥田からの伝言 ──

間　宮　正　幸*

# Counseling and guidance for human development respond to the needs of our age: The message from Kido, Tomeoka and Okuda as leading psychologist in Japan.

Masayuki MAMIYA

**要　旨**

時代に応える臨床心理発達相談とは何か。40 年に及ぶ自己の子ども・若者の自立支援の活動を振り返ると、北大教育学部の先達の問題提起を今日の時点で再考することの重要性が浮かびあがってくる。それは、「現在の日本の生活を問題にする」（城戸幡太郎）、「生活教育論」（留岡清男）、「生活能力の形成」（奥田三郎）などの「生活」をていねいに支援する議論である。古く、戦前の 1930 年代の日本の生活現実から発された提言であるが、現代の子ども・若者の問題をも捉えていて、今なお、精彩を放つ。私たちはここから離れてはならない。

**キーワード**：臨床心理発達相談、北大教育学部の先達、奥田の臨床心理学、生活能力への着目

**Key words**：Counseling and guidance, Three leading psychologists of our faculty of education, Clinical psychology by psychiatrist Dr. Okuda, Attention to the ability of living

## はじめに

これまで、全国の臨床心理士養成大学院の附属相談室から多くの紀要が発行されている。北大の臨床心理発達相談室にもそれらが届けられ、私自身、折にふれて参照してきた論文・案内などは数えきれない。紀要は、関係する教員、大学院生らが自らの実践をまとめて投稿し広く議論を尽くす機会を提供するのであるから発刊の意義は大きい。しかるに、私たちの相談室紀要は事情が重なってずいぶんと遅れを取ってしまった。初代室長としては申しわけない気持ちでいっぱいである。

2017 年 3 月に、私は北大を定年により退職した。その際、研究室に収めてあった蔵書・資料を半減するよりなかった。相談室紀要はもとより、各種ジャーナルについても選りすぐりの文献しか自分の書斎に持ち込むことができなかった。その中で、これは大学相談室の記念碑的紀要であると考えて唯一残したのが『京都大学教育学部心理教

* 北海道大学名誉教授

育相談室紀要　臨床心理事例研究 3 号』(1976 年)である。このなかの、苧坂良二元京都大学教育学部教授（知覚心理学）らが寄稿した「臨床心理学と Case Study」特集が私に与えたインパクトは大きく、未だに内容を記憶している。なにぶん、当時の、心理学界の重鎮である実験心理学者が、注文付きとはいえ「人間論の中で、中心的位置は臨床学が占めるであろう。（中略）臨床科学の中でも臨床心理学が王座を占めるのではなかろうか」という一文をしたためていたのだから驚きに近かった。同時掲載の河合隼雄論文には「事例研究（Case Study）はまさに Study として、臨床心理学の第 3 の道を切り拓く、もっとも有力な武器となるのではなかろうか」という提言があった。こちらは、折に触れて人々に引用され続けた。後に刊行された単著に転載されているので読まれた方も多いに違いない。

1960 年代後半、日本臨床心理学会が「紛糾」して学術的討論の場を失い空白状態が続いていた最中の 1976 年のことであるから、この紀要の発行は実に重要な意味をもっていた。そのことを若い方々は想像してみてほしい。心理学を学んだひとりの若手をして「心理臨床の世界で生きていけるのかもしれない」と希望を抱かせるだけの大きなちからをもっていたのである。いつでも、相談室紀要というものは、相談のしごとに従事するものに希望を抱かせ、人間発達援助のしごとについて根本から考えるような論考が求められるのであろう。それは必ずしも臨床心理面接、臨床心理査定における方法のことがらだけとは限らない。

今日、大学相談室の紀要は数多い。ただ、編集のしかたが標準化またはパターン化してきて、いささか面白味に欠けるような気もする。京大の紀要発行以来 40 年余りの月日が過ぎて、いうなれば相談室実践研究のプラトー（plateau）現象のような印象がある。

さりとて、心理相談・心理臨床の第一線を退いた今、私自身、何か気の利いた新しいことを述べることはできそうもない。それならば、むしろ、城戸幡太郎（きど・まんたろう：1893–1985）、留岡清男（とめおか・きよお：1898–1977）、奥田三郎（おくだ・さぶろう：1903–1983）という北大教育学部における第一級の先達の遺産を掘り起こす作業を何度でも行ったほうがよほど新鮮であると私は考えた。それは、あまり世に聞こえることのない北大の教育臨床心理学の温故知新（過去の事実を研究し、そこから新しい知識や見解をひらくこと）の作業でありつつ、実は、日本の臨床心理学にとっての温故知新といっても過言はないという一面をもつと思うからである。

## Ⅰ　生活能力への着目

### 生活を問題にする

私の、子どもから高齢者までを対象とする心理相談の経験は 40 年に及んだ。活動の舞台は、総合病院小児科・精神科、保健所、大学病院小児科、大学附属臨床心理発達相談室、厚生労働省労働局などに限られたが、私は生涯発達支援の心理臨床に関心があった。北大での専門を「教育臨床心理学」としてきたが、これはそのまま学校臨床心理学なのではなく、北大教育学部の「教育臨床心理学」をめざしてきたつもりである。畢竟、臨床心理士としての自己規定をするのであれば、大学院で担当した「臨床心理的地域援助」が自分の専門に一番近いのであろう。

私は、歴史研究を重視する立場であるから内外の古典の研究をそれなりに行う。もちろん、フロイト、ユング、ロジャーズの理論など臨床心理学の基本の修得を怠ることはない。ただ、長きにわたる修業のなかで、いつしか、「現在の日本の生活を問題にする」（城戸、1951）という私なりの心理相談･心理臨床の基本のかたちがつくられてきた。「こころ」の臨床心理士でないことはないが人々の「生活」を問題にするということ、すなわち、「生活」を心理相談･心理臨床の基本枠に据えようとする。そのことが本稿での主張になる。その場合、「生活」に関する過去の深い議論を忘れない（間宮、2010）。当然のことだが生活＝経済生活なのではない。

私たちが働く場によって依拠する制度や法律が異なるから、小児科・保健所の発達相談、精神科の心理臨床、学校の教育相談、大学の臨床心理発達相談、ハローワークの心理相談というふうに活動の呼称は変わる。しかし、いずれの場合でも、私の相談活動の基本は来談者・対象者の「自己の形成」（la formation du moi）を追求するところにあり、その基本の姿勢は、先の城戸のことばに代表される生活支援の思想と科学に支えられている。それは、人々の生活の権利を守り、自己の変革と表現を尊重し、環境に働きかける主体の形成に寄与しようとするものである。北大教育学部で伝統がある特殊教育研究（初代教授は奥田）、教育福祉研究（留岡の系譜）と隣り合わせて、というより一体となった活動ということもできるだろう。私はこの三ゼミは「きょうだいゼミだ」と学生に伝えてきた。

今や、国民生活のあらゆるところに臨床心理士のしごとが浸透しつつある。不登校の生徒が学校に行くことができるのか、それとも自宅にひきこもるのか、相談室にとってそれは大きな課題であり続けた。しかし、不登校・ひきこもりの状態にあった子ども・若者のその後の生活を見届ける相談になると、それは、もはや単に心理相談・心理臨床とは呼ばれなくなる。資格は何であれ若者自立支援には総合性が求められるからであろう。私自身の実践の 40 年を回顧して印象深いのは、この 10 年以上続いている労働局《わかものハローワーク》での心理相談である。もとは科学研究費補助金により「日本の若者自立支援」に関する研究をはじめようとした際、その具体的な場として出会った。ところが、厚生労働省・労働局に受け入れられ、困難をかかえる若者の求職活動支援の一環として欠かせぬ事業として位置づくようになった。なぜに、心理臨床は「こころ」だけをいうのかと問うようになって久しいのだが、厚生労働省労働局での就労支援に伴う心理相談ならば「労働と生活」という現実への配慮を欠かすことができない。実際、臨床心理士のしごとの範囲が拡大され、私の思いと同じように臨床心理士の任務や課題の性質が変容してきたと感ずる人は多かろう。

私の子ども研究を導くフランスの精神科医アンリ・ワロン（Wallon, H. 1889–1962）が、1929 年に、パリの《国民職業指導研究所》創設に参加し、労働に関する研究を行ったことが思いだされる。生きることの困難をかかえる子どもたちの将来に労働と生活の保障は欠かせないと、ワロンはいち早く気づいていた結果だろうと察している。

## 相談・支援とは何か

ここでは、主に子ども・若者の支援を考える。

相談・支援というしごとの目的や方法を考えるとき、以前から、私は、世界で最も古い伝統をもつフランスの児童精神医学の到達点に注目してきた。パリ大学医学部の第三代目児童青年精神医学教授デュッシェ（Dushé、1974）らがいうように、不調和 désharmonie をかかえながらも生活して行く子どもの成長・発達を促すにはどうしたらよいかを皆（チーム）で考えていく、そのことが診療・相談・支援活動の基本だと考える。だから、心理査定と心理面接の方法しかもちあわせていないからそれをあてがうという発想をしない。これは、以前、学会シンポジュウムでの浜谷直人（発達心理学・首都大学東京）の名言「暗がりで落としたサイフを街灯の下で捜さない」に相通ずることだと思っている[1]。大学相談室は人員に限りがあるので多職種チームを組むことができない。むしろ特別の場合と自覚しておく必要があるだろう。実際の相談室の活動においては、学校、地域社会、それに世界と日本の政治経済が一体となって子ども・若者が成長する環境を形成していることに気づいていることが望ましい。

そうすると、城戸のいう「現在の生活を問題に

[1] 第 27 回日本発達心理学会国内研究交流委員会企画シンポジュウム「実践から立ちあがる子どもの見方」（報告者：田中康雄・木下孝司・間宮正幸・浜谷直人）での発言。北海道大学、2016 年。

する」という値打ちが浮かびあがってくるだろうと思う。「人間の存在とは、彼らの現実的な生活過程のことである」、「人間の本質とは個々の個人の内部に宿る抽象物なのではない。それは、その現実の在り方においては、社会的諸関係の総体ensenmble なのである」(『ドイツ・イデオロギー』)というマルクス・エンゲルスのことばも甦ってくる。私は、心理臨床家だからといって「個々の内部に宿る抽象物」ばかりに拘泥しない。社会の共同のなかで自己を形成するということに重きを置く。もちろん、精神分析・夢分析を必要とする場合（case）もあるだろう。

城戸は北大教育学部の事実上の創設者で第二代学部長であるが、私は北大教育学部に着任したからといって彼に接したのではない。そうではなくて、戦前からのわが国の臨床心理学の歴史を総括する機会を得て、城戸らの心理学に着目することになった(間宮､1998)。日本心理学史を顧みると、実は、心理学で初めて「生活と実践」を問題にしたのは 1920 年代に留岡との論争を経た城戸なのであり、彼の問題提起を酌まずに実践を論じて済ますことはできない。

私は、その論考で、戦前の心理学・教育科学の城戸の仕事を臨床心理学研究における「戦前の遺産」として紹介している。戦前の城戸の研究と実践は、視点を変えて見るならば、それは教育心理学というのみならず、今日にいう教育臨床心理学研究の先駆者というべき位置にあるというのが私の見解である。当時の「精神薄弱」研究の領域における城戸の精神医学者・教育実践家らとの共同研究は、この領域の理論的な先駆者としての位置を占める。城戸をさしおいて児童相談の歴史を議論することは妥当性を欠くことになるだろう。ただし、時代の制限を受けて彼自身が実践家ないし臨床家であったわけではないから、相談方法の逐一が述べられているのではない。

たとえば、大泉溥編『日本の子ども研究』（クレス出版）の第 6 巻『1930 年代日本の児童研究』に収められている、城戸幡太郎著「児童研究の歴史と問題―児童心理学の問題を中心として」（もとは『教育』第 3 巻第 4 号、1935 年）がある。1935（昭和 10）年の段階で、「従来の児童研究の多くが生活問題と無関係になされたことは学問の研究といふことが社会生活､国家生活とは無関係であり、従って学者の生活が社会から遊離されていたからである」などと「学問の社会性」を問うている。きびしい見方かもしれないが、私は、この論考を、その後の日本の教育心理学・臨床心理学への警鐘だったのではないかと位置付ける。

以下に、少し長い引用を行いたい。城戸が社会のなかに生きる研究者、または、実践家としての心積りまたは態度というものがあることを教示している。

「児童学の問題もかかる意味で児童の社会問題を中心として研究されるようになり、児童研究の機関としての児童研究の設立が要望され、研究の発表機関としての児童研究の雑誌や紀要の如きものも多く見られるやうになったのであるが、しかしまだ学問の研究は国家的に統制されていない。しかし、学問の国家的統制といふことはナチスの国家のやうに政権への服従を意味するものではなく、国民生活の発展のために学者が協力して研究をなすことで、かかる学者の国家的協力によって国民の文化は発展するのである。かかる見地から現在の我国の学問研究の態勢を見ると、そこには何ら国家的統制は認められない。児童研究の必要が認められても、未だ、何れの帝国大学の教育学科にも医学、心理学、教育学の学者が協力して研究し得る児童研究所の如きものは設立されていない。一つの綜合大学においてさえ、学問の統制はとれていないのであるから、いわんや学問の国家的統制は問題にならないかも知れぬ。現在の我国においては、児童学が問題とされる前に先ず児童研究所が問題とされねばならぬ。児童の生活に学者が関心を持つことによって、児童の環境閾は更に広められ、児童学の問題は児童、教養者、研究者の実践的交渉による生活場面のうちに発展するのである」

こうして、子どもの生活に学者が関心を持つこと、それを児童研究所の設置で一歩前に進めよう

と説く城戸がいた。昭和 10 年とは、「満州事変」（1931 年）の 4 年後、盧溝橋事件にはじまる「日中戦争」の 2 年前の年である。それからの日本は、人々のこころもいのちも奪う時代に突入していく。今、この時の城戸の緊張を私たちは共有するべきだと私は思う。私たちは、ここで城戸がいうところの「児童研究所」に相当する臨床心理発達相談室を得たのであるから、「国民生活の発展のために学者が協力して研究をなすこと」にちからを注ぐことである。もちろん「学者」を「相談員」と呼び変えるのがよいだろう。

さて、2018（平成 30）年の今ならば、私たちの緊張とは何だろうか。

具体的に、わが国における不登校やひきこもり問題ならば何に緊張することが求められているかと反省してみる。すると、私たちはこれらの問題の現実に容易に接近できていないことに愕然とする。城戸の提起の実際は「生活力の涵養」であったのだが、今日の不登校・ひきこもりの問題にも同じことがいえるのではないかと私は考える。

学校に行くか行かないかを問題にするのではなく、子どもの「生活力の涵養」を考え、「学力と人格の結合」ないし「全面的成長」を考える（間宮、2016）。彼らの人生がどのように展開していくのかを考える。「生活力の涵養」は自己の主体性の形成と切りはなすことはできないのであるから、私たちの相談活動はその一端を担っているというふうに考える。

## 生活力の涵養

ここでは、1930 年代に「生活能力」というパースペクティヴをもつにいたった城戸の一連の先行研究を評価しつつさらに論じよう。

通常の心理相談・心理臨床においては「子どもの心理を問題にする」ことが出発点であろう。環境を変革するのではなく、結局のところ心理的な適応を支援の目的とすることになる。ところが、城戸は「現在の日本の生活を問題にする」という。このような思考は共有されにくいかもしれない。しかし、私は、これが臨床心理発達相談の活動にとってどれほど重要な意味をもつかあらためて確認しておこうと思う。

第 2 次世界大戦後の比較的早い時期に、北大着任前の城戸が、教育学の東京大学教育学部助教授大田堯と対談を行っている（城戸、1951）。私は自分が生まれた年に行われたこの対談にずっと注目してきた。雑誌『教育』の再刊創刊号に掲載され、教育学史のなかではきちんと位置づけられている。60 年後に、東日本大震災が起こり、福島の原発避難の子どもへのいじめ事件も多発している今にも生きている、実に含蓄のある話である。

「われわれの『教育』というものは、ただ学校教育のようなことであってはいかんと感じた。ことに東北・北海道の生活問題を解決するためには誰が先に立ってはじめるか。東北の教師たちは率先して、生活問題の改善にのりだしている。それを子どもたちに自覚させている。これが本当だと感じた（中略）綴方によって、子どもの生活にたいする自覚、生活にたいする改善意欲をもりたてる運動がおこった」

これは、戦後の地域社会を創っていこうというときに、地域に立つ教師への期待から発せられたことばである。この城戸の発言を理解するためには少しく背景事情の解説が必要であろう。城戸は、歴史をさかのぼって 1937（昭和 12）年に、後に北大教育学部で教育・研究をともにすることになる留岡とともに東北・北海道の「教育巡礼」を行っている。1937 年夏、北海道綴方教育連盟の座談会に臨んでの次の発言が知られる（城戸、1937）。

「綴方教育は児童の生活を理解し、生活態度を自覚せしむることはできるが、彼等の生活力を涵養することはできぬ」

この論文には「生活学校巡礼」という題がつけられている。これが広く知られるところとなり、戦後もしばしば引用されることになる。子どもを理解するということだけで終わってはならない、それだけでは子どもの生活力を育てることはできない。城戸はそう述べている。1930 年代、労働争議や農村部の小作争議、「娘の身売り」など社会の現実に直面して「生活」ないし「生活能力」とい

う実践概念を提唱することになったのだが、このことが現在の日本であらためて注目されてくる。

この対談では主に教師に向かって発言されている。しかし、心理相談・心理臨床に従事する現在の私たちにもそのまま迫ってくるものがある。まさに、現代の貧困のなかで生きる子ども・若者の問題にどう私たちが向かうのか、学校教育を揺るがすほどに大手を振る「学力」と「道徳」の教育とは何なのか。なにゆえ、文部科学省・教育委員会はこれほどまでに「学力」と「道徳」を押し付けようとするのか。部活で生徒も教師も苦しむのはなぜなのか。つまりは、教育や社会の弊害を遠くから眺める臨床心理発達相談でよいのか。そうしたことが問われている。

数々の問を、時には政治経済と社会の歴史動向にまで踏み込み、文部行政の実態を明るみにしながら根本から検討してみる。そうでなければ子どもの苦しみもまた理解されない。子ども・若者の問題は社会の複雑な総体 ensemble なのであるから私たちもまた総体で取り組むことがふさわしい。城戸が好んだのはそういう根本的な議論である。私は、教育科学の一翼を担う臨床心理発達相談も同じことが求められていると思う。

## Ⅱ　北大教育学部の臨床心理学

### 「生活」を問う心理学

心理学において「生活」はどう扱われてきただろうか。今日、世界で注目を浴びるロシアのヴィゴツキーの『教育心理学講義』（1926 年）が、情動と「生活」に注目した心理学の先駆けだったことは意外に知られていない。たとえば、彼が「結局のところ生活が教育する」のであり「教育問題は、生活の問題が解決されるときに解決される」と述べていることを、資料が整った現代のヴィゴツキー心理学をもって深く考えてみるべきだろう。

こうして子ども研究の歴史をひも解くとき、1920 年～1930 年代にかけて、たとえばフランスにおいて、La Vie（ラ・ヴィ）と題した子どもの研究書や啓蒙書がたくさん出版されていることに私は注目したい。La Vie とは、生命、生、生気、生活、生涯ほどの広い意味をもち、通常、文脈に応じて「生活」という日本語に訳される。フランスでそれらが示されたのは、何といっても、その時代の子ども・若者の人生が、戦争の加害・被害、障害、虐待、過酷な労働、貧困などによって危機に瀕していたからである。だからこそ、指導、保護、教育・再教育、あそびと労働、職業指導などが強調された。その時代とは、すなわち、ふたつの世界大戦にはさまれていた不安な 20 年間のことである。ドイツでは、ナチス（国家社会主義ドイツ労働党）が台頭してくる時代に該当するが、フランスでは少し事情が異なる。19 世紀の中ごろ、文学者ヴィクトル・ユゴー（Hugo, Victor-Marie. 1802-1885）が、先駆的に、労働者の権利、女性の権利と並べて子どもの権利にふれえたのは、子どもの成長ばかりか、その生存さえもが危うい事態にあった現実を背景にしていたからである。子どもに直接かかわっていたその時代の教師や医師たちは、世界の政治経済的危機と子どもの人格の成長が繋がっていることに気付いていたということができる。したがって、フランスの彼らがいう環境（milieu）は、イギリスのウィニコット（Winnicott, D. W.）がいうような、母親らによるほどよい環境というだけではなくなる。この捉えの違いは心理相談・心理臨床の方法の差異を生み出すであろう。

こうした世界の動向から影響を受けつつ、1930 代、わが国において「生活」ないし「生活能力」を捉えようとする心理学研究者のグループが形成されたことが、今、注目されるのである。戦後に東京大学教育学部や北海道大学教育学部などで教育・研究を行うことになった教育科学研究会のメンバーたちで、私たちの心理相談・心理臨床の実践・研究からも関心が高まる。

城戸についてはすでに少しふれた。忘れてならないのが、1949 年に北大に着任した奥田三郎と 1952 年に着任した留岡清男の心理学である。

すでに本稿で城戸の文献を引用しているが、大泉溥編『日本の子ども研究　全Ⅲ期 15 巻別巻 5』

には、特筆すべきことがある。それは、第7巻に『留岡清男の子ども研究と生活教育論』が、第8巻に『奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論』が収められていることである。従来、留岡は、『教育農場五十年』（1964年、岩波書店）の著者であり非行少年の矯正教育、すなわち、教護・児童自立支援を研究した北海道家庭学校第4代校長かつ北海道大学教育学部社会教育講座初代教授と紹介されてきた。また、奥田は、東京の松澤病院時代に「精神分裂病の欠陥像について」（『精神神経学雑誌』1942年）を書いた精神科医として知られ、戦後は北海道大学教育学部特殊教育講座初代教授を務めたとされてきた。その際、ほとんどが城戸とのかかわりで語られている。なぜなら、これまで、留岡と奥田の研究はじゅうぶんに検討されるだけの原著資料がわれわれの手元に届かなかったために広く研究される機会に恵まれなかったからである。まして、心理相談と心理臨床の研究という観点からの議論は乏しいものだったが、奥田は「40年間の臨床心理学的立場」（奥田、1967）と自らを表現している。

明治・大正・昭和を通して心理相談・心理臨床の研究というくくりであらためて彼らの業績の総括を試みると、これまで、彼らは臨床心理学研究の主流に見出されることはなかったけれども、まったく違った一面が浮かび上がってくる。

彼らに共通するのは、障害をもつ人々など弱者支援の実際と理論構築における「生活と権利」の追求の姿勢と力強さである。私はこれを大泉（1998）にならって「土着の心理学」と紹介してきた。外国からの輸入ではなくて日本の実践現場から練り上げた土着の教育臨床心理学が戦前からあったのである。大泉の編集になるこの出版の機会を得ることができなかったならば留岡も奥田も忘却のかなたへと追いやられる可能性があった。しかし、北海道大学の臨床心理発達相談室の紀要創刊号というならば、彼らのしごとにふれないわけにはいかない。とりわけ、精神科医の奥田は、1951年に北大教育学部特殊教育講座初代教授となり講座を導いた人である。後に、この講座は特殊教育・臨床心理学研究グループとなり、1993年には教育臨床心理学講座がそこから枝分かれするかたちで設置されたのであるから、北大教育学部の臨床心理学の源流をたどれば奥田に至る。

### 留岡の生活教育論

まず留岡のしごとに少しふれておく。法学部から転部をして東京帝国大学文学部心理学科を卒業した留岡は、1920年代から、城戸と共に心理学の研究を軸に集い、1937年に教育科学研究会に参加した。そして、早くから子どもの「生活」ないし「生活能力」の観点の重要性に気づいて議論を深めていた。戦後、第4代北海道家庭学校校長として非行臨床に取り組む。この事実が、今日のわが国の心理相談・心理臨床の研究に示唆を与える。大泉（1979）の「日本の教育心理学―1930年代日本の教育科学運動から学ぶ―」をもって嚆矢とするが、ここでは、心理相談・心理臨床との関連に絞って少し論じよう。

私たちが生きている今という時代の歴史認識を高めると、1930年代の城戸や留岡の議論が実に鋭く迫ってくる。1937（昭和12）年の、留岡による北海道の教師への生活綴方教育批判は、先の城戸の場合と合わせて教育学でしばしばふれられる有名な文言である。「酪聯と酪農義塾」（1937年）で留岡はこう書いた。

「このような生活主義の綴方教育は、畢竟、綴方教師の鑑賞に始まって感傷に終わるに過ぎないといふ以外に、最早何も言ふべきことはないのである」

この一文、実は、教師の生活指導の内容を問うているのであって、生活綴方教育批判を第一の目的に行ったものではない。実際には、以下の文章に続く箇所である。

「既に理解されるやうに、今日の社会は、特に農村は、人間の生活の最小限度を保障していない。生産収入に於いて、負債に於いて、医療に於いて、農民は人間的生活のボーダー・ライン以下に置かれている。然るに、今日の教育は、小学校でも、青年学校でも、また農学校でも、最小限度を保障

されざる生活の事実から遊離して、最大限度の観念に満足一般論を教へている。言ひ換へると、現実の生活は、常に最小限度の事実を照準として思考する思考力によって批判され響導されねばならないのに、学校教育の現実は、常に最大限度の概念に満足する思考類型によって一般化され、抽象化されている。今日、学校教育が観念を有していても方法をもたないといはれ、生活を対象としながら生活から遊離するといわれるのは、畢竟、最大限度の観念に満足し、従って観念の整理のみをよろこぶ思考類型を固執するからである。」

舞台が北海道札幌市であるだけに、これを読む度に、私のからだに強い衝撃が走る。「農民」とあるところを、たとえば「若者」と置き換え、「観念」を「こころ」または「道徳」と言い換えるとまさに 21 世紀の現代である。このような留岡の鋭利な議論が「児童観と教育」(1940 年) へと続いた。

留岡は教育学部社会教育講座の初代教授だったが、非行臨床心理学者の一面を持つ。しかし、ここでは、私たちの臨床心理学講座の直接の先達にあたる精神科医奥田三郎に話題を移そう。

## 奥田の臨床心理学

### ⑴ 奥田の経歴と業績

1930 年代の日本に、子どもや精神障害者の「生活能力」の形成や人権を語り、しかも、実践に着目した研究があった。このことは、今日の時点で顧みるに日本心理学史における救いといって過言ではないほどに思える。以下に、これまで、あまりふれられることのなかった医師奥田三郎の場合を検討しよう。大泉溥編『日本の子ども研究』第 8 巻に貴重な資料が掲載されている。第 8 巻の目次は次のようである。

第Ⅰ部　戦前の心理学・精神医学
第Ⅱ部　戦前・戦中の知的発達障害児処遇論
第Ⅲ部　戦後の心理学・精神衛生と特殊教育
第Ⅳ部　通信教育テキスト
第Ⅴ部　北大幼児園の関係資料と『北大教育学部特殊教育研究会ニュース』より
第Ⅵ部　留岡清男と家庭学校のこと
第Ⅶ部　小金井学園の関係資料
　第 1 章　小金井学園の関係論文・回顧録など
　第 2 章　小金井学園の記録
奥田三郎年譜

大泉溥編纂『日本心理学者事典』(2003 年) の奥田の紹介が詳しいので略歴を転載する。また、以下の論述では「奥田三郎所蔵資料」を保管する、元浅井学園大学大学院教授で特別支援教育研究者の市澤豊著『福祉に生きる　60　奥田三郎』を随時参照する（市澤、2011 年)。

> 奥田は、1903 年、北海道旭川市に生まれた。第一高等学校を卒業。1922（大正 11）年に東京帝国大学文学部哲学科に入学したが、 1 年足らずで心理学科に転じた。1925（大正 14）年卒業。卒論は「他我の認識について」であった。私立巣鴨中学校の教員となるも、すぐに、松沢病院心理室に勤務。1926（大正 15）年、東京慈恵会医科大学医学部入学。1929（昭和 4 ）年、医科大学学生の身分ながら法政大学児童研究所の設立で所員として参加。1931（昭和 6 ）年に卒業。東京帝国大学附属病院で 1 年間研修し、1932（昭和 7 ）年に松沢病院に医局員として勤務し、1946 年 3 月まで在職した。1932 年から児玉昌（こだま・さかゑ）の後を受けて小金井治療教育所（1935 年に小金井学園と改称）を運営。

こうして奥田の略歴を見ると、私が学問的恩恵を受けてきたフランスの心理学者たち、ジャネ、ワロン、デュマらの経歴にも似て哲学と医学の学修に特徴がある。岩波講座『教育科学』(1933 年) の「精神治療学」、城戸幡太郎編『教育学辞典』(1938 年) に寄稿した「治療教育学」を参照すると、当時の独仏英米の先進事情にふれられていて今もって高い水準の記述であることが理解される。たとえば、「治療教育学」の項目では、フランスの精神

病理学者と教育家の協力連携が半頁にわたって記述されている。私は、このようなフランスの事情が1938年に奥田によってすでに記述されていたことを北大着任後の21世紀になって知った。しかし、すでに奥田は忘れられようとしていた。一層の驚きは、その当時から、奥田は、欧米の心理学を紹介する研究者に留まっていたのではなく、目の前の子どもたちと生きて、子どもたちに向き合って「生活能力」の形成を考えていたことである。

### ⑵　奥田の子ども研究の実際

奥田は、戦後、北大教育学部の特殊教育講座初代教授として次のように綴っている。その時の教育学部長は城戸であった。これは、「北大幼児園が開かれた」という一文で、1952年のものである（奥田、1952）。

「11月15日、七五三の佳日に、北大幼児園が開園式を挙げた。本園は、その名の通り、保育所でもなく、幼稚園でもない。この中間を行くものである。目的は、幼児教育の研究を主とし、併せて地域社会の要望に応じ、研究と実践をマッチさせて、些か貢献しようという点にある。元来は、教育衛生研究室の仕事の一つとしてチャイルド・クリニックを設け、同時に特殊児童を主とした保育教育をやろうとの意図から出たのであるが、この準備を進めている間に、近隣社会からの要望が強く、今日にみる如く、忽ちにして120名程を取扱う幼児園になったのである。従って、施設は甚だ不十分で、色々、難問題に当面している始末であり、第一の急務は、ホールの確保である。幼児教育の問題は、特殊児童に対する早期教育の問題も含めて、未解決の事項が山積している。これを、現実に置かれた条件下に於いて、一つ一つ解決して行こう、と努力している次第である。各方面の御支援を願いたい。（奥田）」

このように、北大幼児園は1952年に開園したのだが2010（平成22）年3月に幕を閉じた。その場が現在の臨床心理発達相談室であることを私たちは忘れてはならないと思う。

ここにいう「元来は、教育衛生研究室の仕事の一つとしてチャイルド・クリニックを設け、同時に特殊児童を主とした保育教育をやろうとの意図」とは奥田の本願であったろう。1966（昭和41）年春、退官にあたっての最終講義でも「臨床心理実験室と保育実験室の必要性」を語っている（奥田、1967）。

奥田の、特殊教育講座教育衛生研究室は、1993年、「教育臨床心理学講座」と名を変えて教育・研究を開始することになった。そして、2011年に臨床心理士養成コースの「臨床心理発達相談室」が設置されて、正式に市民を対象とする外来相談（有料）を開始するに至った。心理系教員の人員の制限から、全国的には遅きに失したスタートであったけれども、北大教育学部の臨床心理学研究には歴史があることを確認しておきたい。

では、奥田の臨床心理学、彼が構想した「治療教育的人間学」（市澤豊）の展開とはどのようなものであったのだろうか。

第8巻の中で、奥田が関わるもっとも古い資料として「小金井学園の関係資料」のなかの「法政大学附属児童研究所設立趣意書」（昭和4年）がある。これは、奥田が東京慈恵医科大学学生の時で、したがって、「児童研究部　文学士奥田三郎」とある。研究所は「家庭の方々へ」と題する案内に次のように記している。

「法政大学附属児童研究所では専門の学者が集まってそれぞれ専門の立場から児童を研究すると同時に、また子供の性情や知能や体質等を科学的に調査して、教育の仕方学校の選抜或いは選ぶべき職業のことなどに就いて両親や学校の先生の実際的相談にも応じようと思います。学者は研究室に閉じこもっていずに、こうして皆様の御相談相手となることを却って喜ばしい義務と考えますから、どうぞ御遠慮なく御利用ください。また、児童研究所は、実際に子供を取扱って居られる人々及び子供の保護と福利とについて関心を有される人々に対しても、研究の結果を報告し互に意見の交換をし合うと同時に、出来る限り研究上の助言も致したいと思います。」

今でも同様だが、現実の大学の附属施設であるならば諸制限がある。この程度の実践しか提供できなかったということもできる。

次に、1931（昭和６）年の、法政大学優生学研究所付属・小金井治療教育所の「要旨」を見る。設立目的を「精神の発達が普通でない児童を教育し治療し保護することを以て目的と致します。精神発達異常の中でも知能の発達の遅れた児童を主としますが性格異常児も場合により御預り致します。年齢は大体６才乃至 18 才でそれ以下の者又は以上の者でも見込ある者は御引受けすることがあります」とある。所属は府立松澤病院になっており、奥田はまだ医師ではなかった。前年の昭和５年の「講演会発起人」にも名を連ねている。また、1935（昭和 10）年の「小金井学園々則」第１条には、「本学園ハ智能ノ発達ノ遅レタル児童及ビ軽度ノ性格異常児童ヲ教育、治療、保護スルヲ以て目的トシ、併セテ児童ノ教育相談並ビニ鑑別ヲナス」とある。幹事として奥田三郎の名前があり、この時は医学士文学士となっている。

小金井学園での彼らの研究と実践を再度振り返っておこう。もとより、ドイツ・ライプチッヒ留学（1922～1924 年）以前の東京大学文学部副手時代の城戸が主催した「読書会」以来、彼らは哲学・思想を相互研鑽的に深める交流があったことは周知のことである。しかし、彼らを児童相談あるいは教育的支援の実際に結びつけた具体的な場所は滝乃川学園（石井亮一園長）や小金井学園だった。『小金井学園園則』の第１条にある「本学園ハ智能ノ発達遅レタル児童及軽度ノ性格異常児童ヲ教育シ治療シ保護スルヲ以テ目的トシ併セテ児童ノ教育相談並ニ鑑別ヲナス」という設立の当初の目的を果たそうとするならば、医学の担い手が不可欠であったろう。学園の理念は、「医学と心理学、教育学を協力させて、精神薄弱児の体質、能力、社会的立場を伸ばそう」というものだった。これは、治療教育研究所の創設者であった児玉ら、当時、精神病学者であった人々が、ドイツ、フランスなどヨーロッパの精神医学の流れの影響を受けて、「異常児童」、すなわち、今日にいう発達障害児ないし成長・発達に困難を抱える子どもの研究と支援に着手しようとしていたことを受けている。児玉は、後に名古屋市立大学神経精神科初代教授となる。

市澤によれば、奥田は、自分の精神薄弱教育の恩師は児玉晶と石井亮一であると公言しており、また、日記でもそのように児玉を評価している。「机上の尤もらしい理屈や道義論ではなくて、すべてが実際の児童並びにその教育に即した事柄のみであって、児童発達の具体的様相と、それに即しての教育的配慮とが、常に科学的に把握され、基礎づけられて居るのである」という石井亮一の遺書整理にあたっての一文こそは、むしろ、奥田の信条そのものを物語っている。奥田は、戦前、「早発性痴呆症ノ統計的臨床的観察報告」（1942 年、第８巻所収）などの高い評価を獲得した実証的臨床精神医学の研究があり、脳解剖も手がける医師であった。このことは、研究が「科学的に把握され、基礎づけられて居る」ことを尊重する基盤になっている。

奥田が構想した北大の「チャイルド・クリニック」も本来は戦前に考えたことに近かったのではないか。「子どもの生活と精神衛生」（1957 年、第８巻所収）では次のように述べている。

「ともあれ、生物―社会的　bio-social にとか、社会―心理―生物学的　socio-psycho-biological にとかいう語が、全体的にとか、力学的にという言葉とともに精神衛生の場合、むぞうさに使われている。これ等が、１つの心構え、態度としての見方へ注意を促すだけではすこし物足りないのであって、もっとこれに生物学的な内容を盛る努力がされてもよいように思われる。私は、精神衛生学は、精神健康に必要な生物学的条件を明らかにすることを中核として考えたい」と、医師の面目が語られている。その後の北大の特殊教育講座の研究を方向づけている。

1930 年代、すでに「精神薄弱児の生活能力」（第８巻所収）という題目の論文が２本あり、戦後、北大に赴任後には、北海道家庭学校の子どもたちについて調査した「問題児の社会的予後」（『北海

道大学教育学部紀要』1955 年）や「子どもの生活と精神衛生」（『児童発達』1957 年、第 8 巻所収）など、子どもの生活や職業教育に関する問題を論じたものもある。

奥田三郎の臨床心理学は、成長・発達に困難をかかえる人々の支援に大きな関心が寄せられている今日、特別に顧みられてよいものがあると考える。「精神治療学」（1933 年）、「治療教育学」（1938 年）および「治療教育法」（1938 年）の辞典項目の 3 点は、今もって、わが国における臨床心理学と治療教育学の白眉というべき論考である。

奥田の「生活能力」への着目は今日の私たちの実践に示唆するところがはなはだ大きいのである。

## 文　献


Duché, D.（1974）. *La psychiatrie de l'enfant.* Collection QUE SAIS-JE?, 吉倉範光（訳）（1975）. 子どもの精神医学. 文庫クセジュ, 白水社, pp.123-132.

城戸幡太郎（1935）. 児童研究の歴史と問題―児童心理学の問題を中心として. 大泉溥（編）（2009）. 日本の子ども研究, 第 6 巻, 1930 年代日本の児童研究, pp.89-98.（初出『教育』第 3 巻第 4 号, 1935 年）

城戸幡太郎（1937）. 生活学校巡礼. 教育, 第 5 巻第 10 号, pp.48-55.

城戸幡太郎・大田堯（1951. 対談　教育科学運動　これまで・これから. 教育・再刊創刊号, 国土社, pp.40-46.

間宮正幸（1998）. 日本の臨床心理学の発展―戦前から戦後へ―. 心理科学研究会歴史研究部会（編）. 日本心理学史の研究, 法政出版, pp.117-138.

間宮正幸（2010）.「変えられた」子ども―生活の今を問う. 北海道子ども学会（編）. 子どもロジー, Vol.13・14 合併号, pp.68-74.

間宮正幸（2016）. 全面的発達と学力. 第 60 回北海道教育学会シンポジュウム, 北海道における「学力」の創造と諸問題, 北海道教育大学

大泉溥（1979）. 日本の教育心理学― 1930 年代日本の教育科学運動から学ぶ―. 心理科学研究会（編）教育心理学試論, 三和書房, pp.11-60.

大泉溥（1998）. 第 4 巻別冊解題. 文献選集, 教育と保護の心理学　昭和戦前戦中期, クレス出版, pp.54-77.

大泉溥（2003）. 心理学者事典. クレス出版

奥田三郎（1952）. 北大幼児園が開かれた. 北海道大学教育学部・學報, 第 2 号, p.3.

奥田三郎（1967）. 臨床心理学における“人”の問題. 北海道大学教育学部紀要, 第 13 号, pp.3-41.（大泉溥編（2009）. 日本の子ども研究, 第 8 巻, 奥田三郎の子ども研究と治療教育論, pp.319-383.）

市澤豊（2011）. 福祉に生きる　60　奥田三郎. 大空社

ヴィゴツキー（柴田義松・宮坂琇子訳『ヴィゴツキー教育心理学講義』新読書社, 1926 年/2005 年